

## 滝壺の幻魚

新 保 守

小学5年の秋も終り頃、父親のお供で八飯（今庄町）の山奥へ、山芋を堀りにいったとき、私は、はじめてその山奥で谷を下ってきた少年の手に尺あまりの魚を見た。これが“岩魚”との最初の出会いであったが、子供心に不思議と何かに魅せられてしまった。今思うと、その姿の美しさではなく、背丈ほどに伸びた雑草の中に見た尺あまりの大魚であったのかもしれないが、瞬間私は、床の間に見なれたアイヌ彫のヒグマが鱒をかついだ彫刻を一生懸命思い出ししていたのだ。

山芋を堀り続けるあいだも、眼下に飛び散るあの滝壺のどこかに、さきほど見た幻のような大きな魚がいるのではないかと、もはや私の心をとらえてはなさなかった。

山を下るとき、父親はいろんな話をした。その時初めて“岩魚”という言葉を知り、心の中でくり返し、くり返し呼んだ。岩魚は紅のように美しく、鳥の影にさえおびえる孤独な魚だが、生きた蛇さえ食べるどう猛な一面をもっているという。また、岩魚には雌はおらず、川鱒には雄はおらない、きっと彼等はどこかで夫婦になるに違いないなど、こんなたわいもない話を、このときには本当だと信じながら聞いた。そして誰も知らないこの秘密を、当時は子供だろうと、大人だろうと、得意になって話したものだ。

その後、谷間にのこる雪をふみしめながら、孫谷川、八飯、田倉川とその溪流を釣り歩いたものだが、岩魚は不思議と釣れなかった。ただいつ見てもあの新鮮な魚紋 Parrmark のきわだった美しいアマゴだけだった。これは「すみ分け」によるアマゴの区分帯を釣り歩いていたことになるのだろうが、その後の魚法（もぐってヤスでとる方法）では、同じ場所から岩魚を数多くとっていることを思うと「すみ分け」もあてにはならない。また事実アマゴと思っていた魚は本当はヤマメを釣り上げていたことになるのかもわからない。側線にそって散りばめられたあの印象的な小さい赤斑点だけが外形上の分類のめやすであることを思えば、当時としては、それもやむをえなかった事だろう。

それから10年、これは本当に幻の魚になってしまったが、幸か、不幸か、人間にして鰓と尾鰭をもった悪友に出合い、いやでも今日まで一心同体で、滝壺の虜にならざるを得なかった。釣師というものは、話にだんだん花が咲き、その生態に関しては、己れが学者であるかのように語るものだが、そのほとんどは、やはり貴重な経験から生れたものであって楽しいものである。

ここで私は最も思い出深い滝壺の一つを書かねばなるまい。福井県のさい果て、白山のふもと上小池の滝壺である。下界では丁度真夏だというのに、人を寄せつけないまでに厳しく岩をかむ

水、目の前にびようぶのように立ちはだかる別山、その万年雪の下から湧き出る水を引いて作られたワサビの青さは、一層滝壺を神秘的なものに思わせた。

それでも頭の中に想定された幻の魚“岩魚”の前には勇気を出して裸にならなければならなかった。瞬間目の前が真黒になった。それは常々戦いなれたアブの洗礼である。いつもながらこの“アブおどり”が適当な準備運動となり、いやでも水の中が安全であることを思い知らされるわけである。ついでだから、この八つざきにしてもあまりある、アブの話も書いておこう。

私は水の中でアブの羽音を聞き、アブの洗礼を受けた。それも日頃最も大切にしている鼻の頭をである。話はこうだ。水中メガネ(昔と違って現在のは鼻までかぶさる)がくもったので、メガネをサツと水にとおしてもとの位置に返すほんの一瞬に入りこんだだけのことである。おかげで、しこたま水をのんだものだ。悪友のごときは、口唇にアブの足をはさんだままでもとろうともしない。とっているひまがないのである。おまけに「つくだにだ」とうそぶいて食べてしまったのには、いささかたまげてしまった。

いつだったか、谷川そいで炭を背おった地もとの人にあったが、挨拶がわりに「あ、おそ……」と、顔色を変えて足ばやに去っていったことを思うと、よほど我々は牛か、豚のような存在であるのかもわからない。まあ、どちらにもせよ私達の間ではアブに対する免疫ができるまでは、行動を共にすることは出来ない。

とにかく、アブの洗礼から逃れるためにも、一刻の猶予も無く、もぐらねばならなかった。

数刻あって私は不思議な音を耳にした。「ドツク……ドツク……ドツク……」はげしい私自身の心臓の音である。

背中にボツボツみぞれのふる11月の竹田川で鮭をとりに入ったときだって、3月のサクラウグイをとりに入野川に入ったときだって、川の中はそれほどでもなかった。いやまだしも川の中のほうが外気にふれるよりは暖かいとすら感じた。今は完全に凍りつくようなつめたさである。

視界はどこにいてもすみずみまでが見えるまでに澄んでいるが、魚の姿は、どこをさがしてもいない。寒中に鯉を手づかみにすると、豪語する悪友ですら、二度と続けて、もぐろうとは言はなかった。

カツカともえる薪火に暖をとりながら作戦会議を開いた。“幻の魚”がいるか、いないかだ。結論は簡単である。我々でさえ、凍つきそうでもぐれない滝壺に魚がすめるかと言うわけだが、面白くないのは、一緒についてきた彌次馬である。「この山奥までつれてきて、これでおしまいとは何事か、熱意がない、滝に打たれて修業せよ。」というわけだ。こうまでいわれればトサカにこようというもの、修業という言葉の魔術にかかって、こんどは、落下する滝の裏側にもぐる

# — 私のもぐった滝壺 —

えん堤の滝

H8m

気味の悪いうすくらのうろに  
何匹もの“イワナ”が岩に影をこんだ  
エジプト模様のように静止していた

自然の滝

潜水限界線

水 温

11~12 5~6  
(°C)

カギのように二段に  
なっている

— 福井県の最果ての地 —

上小沢をスケッチ

— S 40年8月12日 —

ことを決意した。

事実これには本当におどろいたのである。この滝壺の歴史と共に刻まれた“うろ”はカギのよう  
に二段におれ上がり、その奥を、わずかばかりの屈折した光りが、かろうじて岩にへばりつきな  
がら凝視する私の視界に見事な幻の魚“岩魚”をうつしだした。

いふされた銀の岩肌にそうがんされた精巧な貝細工のように、体側の橙色の斑点と体側から、

体背面にかけた、淡灰色の小斑点の織りなす、あやしいまでに美しい輝きは、決して、華かではないが、人の心を深く、静かにとらえてはなさない無言のひびきをもっている。あの朴訥な顔短かくて力強い尾鰭、マス科の象徴を誇示したアブラ金鱗、固くとざして語らない頑固な顎骨、どう見ても滝壺の仙人にふさわしい風格をそなえている。

とにかく軍手をはめ、一尾ずつ引き上げたのであるが、彼等は自分の住み家が最も安全と悟っているためか、決して、他に移動しようとはしない。その憎いまでに落ちつきはらった容姿には陸の上の釣師が語る、おくびようで、孤独な魚だという印象は微塵も感じられない。NHKの自然のアルバムにおさめられた「岩魚の秘められた習性」が、またしてもはっきりと思いだされるのである。

本当にとるにおいしい魚ではあるが、私の無謀な、いや自然を愛するレジャーと、ささやかな研究のために、ほうむられた「岩魚」にあらためて冥福を祈ろう。

腹の中に入った岩魚だが、12尾のうち卵巣をもったものはたったの一尾だけであったことを思うと、彼等の繁殖が如何にむずかしいかが、わかろうというものだ。

彼等の胃から、完全な姿で、いまにも動きだしそうな、青コガネやハンミョウが次から次へと出て来たのには、そのどん食ぶりにあらためて驚嘆せざるをえなかった。上池田の滝壺でとった岩魚のごときは、トカゲの溶けかかった残骸がでて来て、うす気味悪かったぐらいだ。

この岩魚だが、魚類測定法に従って、計数部位を測定しても、おそらく同定するには、学者でない我々には、まだまだ困難な問題がある事は確かだ。

Parrmarkにしても、赤点や白斑点にしても、体の背面に虫食い状にのこる斑状にしても、まちまちである。友人の一人が染色体数によって同定すべきだと学のあるところを教えてくれたが、これこそ一層難解な問題であろう。

いつの時代か、海に帰れないまま、あたえられた環境の中に何千年、何万年……と生きぬいてきた彼等には、まだまだ理解できない変異の移行があったに違いない。

また時として、私のメガネに映る滝壺の中にはアユも、アマゴもヤマメもイワナも混棲していることがある。そこには必ずしも、学問的に割り出された、水温による魚類の「すみ分け」は判然としない。彼等に必要なのは「生きる」ことであり、子孫を維持することなのだ。

最後にダムや河川改修、さては心ない人間どもの毒流し(時々見かける)による一網打尽によって、やがて滅びゆく岩魚のために暖かい思いやりはないものだろうか。やがては本当に幻の魚になりかねないことを思うと、一日も早く、我が県でも一部天然記念物に指定して、資源の保護にあたってもらいたいと切に念ずる。

---

<参 考 書>

- 大 島 正 満 （ 1963 ）      日本産イワナに関する研究  
鳥獣集報  
桜鱒と琵琶鱒 魚 雑 5
- 佐 藤 月 二 （ 1962 ）      ゴギ（中国地方のイワナ）広島県文化財調査報告    3 集  
（天然記念物編）
- 中 村 守 純 （ 1962 ）      原色淡水魚類検索図鑑
- 疋 田 豊 彦 （ 1962 ）      北海道東部河川に遡上したオシヨロコマについて、水産孵化  
場研究報告
- 福 井 県 の 生 物 （ 1966 ）      日本生物教育会第 2 1 回全国大会記念